

現代の諸問題と禪

一 はじめに

現代は社会に多くの問題が山積している。日本に限っても、自治体の崩壊の問題・自殺問題・脳死と臓器移植問題・領土問題・人権問題・自然災害・少子高齢化の問題・環境問題・経済格差・企業倫理の問題など多々ある。こうした現代の諸問題に対して、仏教、就中、禅はどのような態度を示しているか。

このことに関して奈良康明師は次のように述べている。

さらに現代には生命倫理、環境問題、人権や平和の問題、宗教間紛争など、新しい諸問題が生じている。仏教はこうした問題に一切関わらず、個の内部を凝視し、個人の救済をはかるだけではないものだろうか。大乘仏教の菩薩の精神はどう生かされていくのだろうか。これに対して、旧来、自ら坐禅し、境界を深め、仏法を実践していることがすでに、最大の利他行ではないかと思えば主張されている。私はその主張自体の正しさを肯がいながらも、それ「だけ」ではすまない状況にあることを論じたい、その意味

下 室 覚 道

で仏教、禅が社会的に開かれた宗教となることを自らに課題としているし、禅仏教全体がそうなることを期待している。しかし、坐禅を中核におきつつ、応用問題として、威儀即仏法を実践しようとしていくとき、旧来の「清規」のように便宜なマニュアルは今日にはない。坐禅と「法」を無視し、ないし軽視した社会的行為は単なる社会的行為であって、仏教者の行為ではない。個の内部を凝視しつつ、同時に人々への暖かいまなざしを投げかける実践を、各人が試行錯誤していくべき時代になっている⁽¹⁾。

仏教や禅は個人救済の教えであり、自己の救いが目的であり、社会の問題に対しては一切関わらないという見解もある。しかし、奈良師は社会的に開かれた宗教となることを期待するとし、しかも、単なる社会的行為ではなく、坐禅、仏法など個の凝視を踏まえた上で社会的に実践していくことが求められると述べている。

現在、曹洞宗では、宗派をあげて取り組むべき実践上の指針として、(すべての人々の平和と幸福を願い)「人権の確立」、「平和の維持」、「環境の保護」を三大スローガンに掲げ取り組ん

現代の諸問題と禪（下 室）

でいる。⁽²⁾このような宗派を挙げた社会的問題への取り組みは多くの宗派において見られるところである。たとえば、脳死・臓器移植の問題に対しては、多くの宗派内で議論され、インターネット上でも報告が示されている。

筆者もこうした仏教からの現代の社会的な諸問題への対応は必要なことであると感ずる。また、特に「禪」は仏教の中でも現実主義に立脚するから、社会的実践に関わる要素を有しているとする竹村牧男氏の見解もある。

仏教は現代社会にあって、ストレスを解消させるひとつの癒しの道としての期待を負っているように思われる。もちろんそれに応えることも、決して重要でないわけではない。しかしそれだけに終わってしまったなら、仏教は歪んだ現代社会を補完するだけのものとなり、社会の非人間的なあり方を放置し、むしろ結果的にそれを助長していくことにすらなりかねない。仏教は、現代社会に傷ついた人々を癒しては、暴走するその現代社会に送り返すだけで、はたしてよいのであるうか。宗教の深みから現実世界に積極的にかかわっていく主体を打ち出すことは、今日の大事であるう。どこまでも現実世界に徹底していく禪に、その可能性を探究することは極めて重要な課題である。⁽³⁾

どこまでも現実徹底していく禪は、現実世界の社会的問題にも積極的にかかわっていく可能性を秘めていると見なしている。

ところで、論題に「現代の諸問題と禪」と題したが、ここで禪とは何かを定義づけなくてはならない。周知の通り、道

元禪師は禪宗の呼称を嫌っている。

禪宗の称、たれか称したる、諸仏祖師の、禪宗と称する、いまだあらず。しるべし、禪宗の称は、魔波旬の称するなり、魔波旬の称を称したるは、魔儼なるべし、仏祖の児孫にあらず。⁽⁴⁾

道元禪師にとって如浄禪師から伝えられた教えは「禪宗」「曹洞宗」というセクトではなく「正伝の仏法」なのであり、同様に「禪師」「禪家」などの言葉も否定している。

それでは、禪とは何か。一般的には「不立文字」「教外別伝」などと言われるように、文字や言葉を通さず釈尊からの教えが伝えられたとされるのが禪の特徴である。その点、道元禪師の立場は独特であって「教家」の書籍に対しては評価しない面もある。

又、云、学道の人、教家の書籍及び外典等、不可学。⁽⁵⁾

こうしてみると禪の大きな特徴は、坐禪を中心とした日々の行い、「実践」であるということがいえよう。無論、禪以外の教えに実践がないという意味ではなく、禪では特に、実践、修行を重視することに特徴があるという意味である。大本山總持寺独住十七世渡辺玄宗禪師は次のように述べている。

昔は、五十になっても八十になっても修行をされた方がたくさんあった。それを今の人たちは禪は学問だと思って修行をおろそかにする。行持を怠って精進履践しようとはしない。これでは禪は滅びるのではないかと心にかかつてしょうがない。禪とか仏法と

かいつて別段むつかしいものではない。淨らかで汚れない生活をしていけば、おのずから仏性が現れるのである。⁽⁶⁾

禪には、坐禪や日々の行持などの実践が必要であり、それを欠いたら禪は滅んでしまうと示している。

そこで以下に、多々ある現代日本の諸問題の中、一、政治のあり方問題について、二、現代人の内面の問題について、順次禪の立場から考察する。

二 政治のあり方と禪

(一) 禪堂のあり方に学ぶ

ここ数年（近年）の日本の政治状況として、たとえば衆議院で与党が過半数の議席を持つ一方で、参議院では野党が過半数の議席を維持している状態、いわゆる、「ねじれ国会」と言われる状況がある。「ねじれ国会」に対しては賛否両論あるが、デメリットとして、国会運営が停滞したり、政府・与党が提案する議案の不成立によって政府の政策実施が滞ることが指摘される。（本年六月二六日、消費税増税法案が衆議院で可決したが、まだまだ今後が不透明である。）日本の政治は「決められない政治」と表現され、最近ではさらに劣化して「全く何も決められない政治」とさえ言われる。このような状況では国内の必要な改革は頓挫するであろうし、外交も当然の事ながら停滞を余儀なくされる。消費税の増税や社会保障制

度の変更、あるいは原子力発電所の再稼動や環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）への参加など、重要な問題が山積しているのに、何も決められない。

毎日新聞二〇一二年四月一五日の論点「消費税と政治」に柳澤伯夫元自民党税調会長は次のように述べている。

「こんなに景気が悪い時に消費を縮めたら、景気対策として全く逆効果」「増税をやるならその前にやる必要がある」。竹下内閣の官房副長官として消費税導入に携わった小沢一郎民主党元代表が消費増税に反対しているが、小沢さんの政治観は「政治は権力闘争」という考え方だ。ある時は消費増税を主張し、また別の時は反対する姿は、権力掌握とその維持のためとしか映らない。自民党も情けない。消費税10%という自らの主張を民主党も言い出したのだから「ようやく分かってくれた」と前向きに捉え、消費増税法案の成立に協力すべきだと思う⁽⁷⁾。

この中に「権力闘争」という言葉がある。多くの政治家たちは、日本の国を良くしようというのとは二の次で、与党になりたい、権力を取りたいという思いのみで動いているのではない。平常時ならまだしも、戦後六五年以上経ち、経済成長も下がり、学生の就職率も悪い現在の状況はある意味、危機的状况であり、そのような時は素早い判断と行動が必要である。お互いの駆け引きを繰り返している余裕などとはやない。政党がそれぞれの政策を実行するために権力を取ろうとするのも致し方ないが、大局に立った政治というものが必要で

現代の諸問題と禪（下 室）

あろう。マスコミの役割の一つに「権力を監視し、政治の暴走を防ぐ」ということがあるといわれる。しかし、反権力のための権力のようにも感じられる。つまり、権力の座についてた与党の政策すべてに対して政権批判しているように見える。言論の自由は大切な権利であるが、こうしたマスコミの態度にも問題はあろう。

戦前の軍国主義では言論統制がなされ、言論の自由が封じ込まれていた。これに対する反発から、それとは反対方向に動き過ぎたのが今日の政治停滞の一つの要因のようにも思われる。

こうした何も決められない政治の状況を見てみると、禪には何かしら学ぶべきものがあるように思われる。

戦前の軍国主義と禪の関係も指摘されており、そこでは禪も批判されているが、平田精耕師は禪の特徴として次のように記している。

かくして日常生活は一つの目的に向かって最も効率的にスムーズに運ばれる。高談戲笑を禁ずる堂内はすべて鳴らしものといわれる鐘や太鼓や打板の合図によって一定のリズムに乗りながら整然と一日の生活が流れる。かつて日本の旧軍隊が兵士の内務の生活を禅堂の清規から取ったというのも肯けることである。一つの道場に集まる数多の修行者は皆一つの同じ目的に向かって進んでいる。⁽⁹⁾

禅における一つの目的とは、「已事究明（証）」であり、一方、

軍隊の場合は「敵に勝つ」ことである。それぞれの目的の正当性については別に議論する必要があるが、共にその目的に向かう効率的な機敏さが求められる。ひるがえって、今の国会運営は、権力が拮抗し、動きが取れなくなっている。「決められない政治」からの脱却が求められているとすれば、禅の僧堂のあり方が一つの示唆にならないであろうか。その効率的な運営方法は非効率的な今日の政治状況を変革する上で大いに参考になるように思われる。禅の僧堂のあり方に学ぶことで、効率的な政治システムが構築されることを期待する。

（二）怨親平等

ところで、仏法によって国を守る、逆に言えば、国が仏教を保護することによって国家が繁栄するという護国思想がある。奈良時代よりすでに護国仏教であり、護国經典として護国三部經『金光明經』『仁王經』『法華經』が信仰された。禅の立場も、「王法主義」であり、これは中国禅以来の伝統思想である。

日本における禅の祖師方と政治指導者との関係を見れば、北条氏の帰依を受けた栄西禅師は、『興禅護国論』巻上第二「鎮護国家門」には、国家を護持し群生を利益することを論じ、禅の護国思想を明らかにしている。

また、道元禅師は、『溪嵐拾葉集』によれば、『護国正法義』を著して、朝廷に奏聞したとされる。また、宝治元年（一二四七）

に永平寺を出発し、鎌倉行化に赴き、北条時頼（一二二七—一二六三）に対して仏法を説いたとされる。

また、両祖の一人瑩山禪師も護国思想を引き継いだ。例えば、仏殿を最勝殿と呼称し、東大寺と同じ様式の釈迦三尊を安置するなどして、道元禪師の護国思想を継承・増幅・強調されている。納富常天師は瑩山禪について次のように述べている。

坐禪の實踐が衆生済度であり、衆生済度の究極が国家の救済、それは護国であると独自の主張をされています。⁽¹⁰⁾

瑩山禪師も仏法による国家の救済、護国思想をもっていたとされる。

ところで、言うまでもなく、現在の日本では国家が宗教活動を行うことは現行の憲法二十条において禁止されている。

信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

②何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

③国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

しかし、政教分離に対しては様々な見解がある。決して、政教分離に至った歴史を否定するものではないが、筆者は、仏教の理想にもとづく政治というものを目指してよいと考える。

現代の諸問題と禪（下 室）

政治の外側から仏教が影響を及ぼすことはできないであろうか。

権力闘争に明け暮れるのではなく、大局に立った政治というものが特に現代においては必要であると感じるが、この点で室町期の禪僧である夢窓疎石は一つの示唆を示すものであろう。

周知のように夢窓疎石（一二七五—一三五二）は「怨親平等」を示したことで知られている。⁽¹¹⁾一三三三年鎌倉幕府が滅亡した後醍醐天皇（一二八八—一三三九）が政権を樹立した。いわゆる建武新政であるが、まもなく崩壊し足利政権が成立した。その際、南北朝の動乱で亡くなった戦没者追悼に対し「怨親平等」の理念を高く掲げ、尊氏（一二三〇—一三五二）・直義（一二三〇—一三五二）を説いて、安国寺・利生塔を国（六六カ国二島）ごとに設置させた。また後醍醐天皇の冥福を祈るために尊氏に追修道場として天龍寺を建立することを勧めた。これも、敵味方を超えた発想である。

現在の日本の政治は「日本のため」「国民のため」というよりも、先述のように、権力をとるための政治のように見える。弱肉強食の世の中であり、権力を握ることが重視される世の中にならざるを得ないということは理解できるが、政治が機能を失ってしまった問題は問題である。権力に対し、権力の外側から「国を護る」という命題で禪に関わることが必要で

現代の諸問題と禅（下 室）

あると考える。

さらにまた、高崎直承師は個人、団体、政党のどれにおいても「欲望の制御」が必要であると唱えている。

しかし、本能の満足や欲望を満たすことだけが、人生の全体ではありません。また、欲望の充足だけで幸福になれるものでもありません。むしろ、欲望中心に動くから、個人でも、団体でも、政党でも事ごとに対立して、社会の混乱をきたし、国と国と対立して融和を欠き、人類の幸福を根こそぎ破壊するような危機をもたらすのであります。（中略）そこで、本能を制御し、欲望を制限するとともに、本能よりも高く強い理想、欲望よりも広くて大きい目的をかかげて、これに向かつて進むところに、人類文化の向上の道が存するのであります。⁽¹²⁾

欲望、政党でいえば権力闘争、を少なくするようなシステムを提示するのも禅の役割のように思われる。仏教の「少欲知足」の考えから、あるいは道元禅師の「貧」の考えから、権力欲を少なくすべしという助言は可能であろう。

（三）威儀作法の重要性

ところで、一般には、戦前の軍国主義の悪しき状況から、戦後は民主主義の良き道を歩んできたと考えられている。この民主主義によって自由と繁栄がもたらされてきたことも事実であろうが、田中治郎氏は民主主義の歪みを指摘されている。

戦後欧米からもたらされた民主主義の歪みがあげられるのではな

いだろうか。民主主義はそれまでの全体主義を一掃し、わが国に自由、人権、平等などの貴重な考えをもたらしてくれた。しかし、当然のことながら、自由の裏には社会に対する責任が、人権の裏には他人に対する配慮と思いやりが、平等の裏には他人との違いを知ったうえでの相互理解が必要であり、それらは個人のすべてを賭した責任として要求される。だが、日本人はそのような思考には不慣れだった。自由は放逸とはき違いられ、人権は不干渉に結びつけられ、平等は長幼の序や人を尊敬する伝統を奪った。しかし、かつて持っていた価値観を捨ててしまった親たちにはそれは見抜けず、子育てに関してはいしつけ不在の時代が到来した。そのため、現代は規範を失ったのである。校内暴力、いじめ、学級崩壊、家庭内暴力、不登校、閉じこもり、若者たちの凶悪犯罪など、私たちが震撼させている諸事象は、日本人が規範を失ったところから来ているのではないだろうか。⁽¹³⁾

田中氏によれば、日本には民主主義が歪められてもたらされ、その結果、校内暴力や、若者による凶悪犯罪が増えたと言われる。その大きな要因として規範を失ったことに由来するという。そしてさらに、道元禅師の『正法眼蔵』の「洗浄」や「洗面」の巻に見られるような威儀作法の重要性、行住坐臥すべてが禅であり、仏祖の行履を慕古しなければならぬという禅師の教えは、今の日本に必要であるとして次のように論じている。

私たちは、具体的にいえば形としての規範を失っているのだ。今大事なのは、私たちが形を持った規範を取り戻すことではないの

だろうか。日本の大人たちは、道元禪師に学び、若者たちにはつきりと形を持った規範を指し示すべき義務を持っているのではないかと思う。行住坐臥すべてが禪であり、仏祖が踏み行ったことをまねて学ばなければならぬという禪師の教えは、今の日本にこそ必要なもの⁽¹⁴⁾に思える。

三 個人の内面の問題と禪

次に、現代人の問題、特に個人の内面の問題として、自殺の問題、あるいは鬱などの精神的な問題について、禪の立場から考えてみたい。現在日本では年間自殺者数が三万人を超えている。この原因は経済の不振や、格差社会にあるという政治の問題もあるであろうが、ここでは個人の内面の問題として捉えていく。玉城康四郎氏は、

よく聞く話であります、一流の大学を卒業し、一流の会社に就職して、会社の中でも皆んなの信望を受け、エリートコースを歩いていて、一般からもうらやましがられている、そういった人物が、突如として自殺する、あるいは蒸発して行方をくらますなどよくきくのであります、私はその方面の調査をしている心理学者から、時々聞かされるのですが、一度現代人の心の内側に入ってみると、何か索漠とした気持ちで物の表面だけに移行行くといった、そういう傾向が次第に強まっているのでございます。そういう点から考えてみますと、禪のきわめて内面的な深まりとということと、現代の世相とがちょうど相反するような方向へ向いているようにみうけられるのです⁽¹⁵⁾。

と述べ、現代人の心の問題と自殺とが関連し、現代人の心は

現代の諸問題と禪（下 室）

何か漠然とした気持ち、表面だけに移行行くという傾向が見られ、それに対して禪の内面的な深まりとは相反していると指摘されている。

平田精耕師も次のように述べている。

文明国の人たちは便利主義に走りすぎて終に生甲斐を失ってしまった。日本もまた然りであろう。しきりに生甲斐についての本が読まれ講演がなされる。生甲斐などというものは本来何かに自己を打ち込んでこそ感じられるものである。自己犠牲なしに生甲斐などは感じられない。最低の衣食住で仏道のために頭を聚める禪堂生活こそは、真に生甲斐を生きる基本の生活といえないだろうか⁽¹⁶⁾。

現代はあまりにも物が溢れ、便利主義になっている。コンビニエンスストアはどこにいつてもあり、夜遅くまで、或いは、二四時間営業しているものもある。欲しい時に欲しい物が得られ、「開いてて良かった」と歓迎されている。しかし、何かに自己を打ち込まずに「生き甲斐」は得られないという。そして、「貧」なる仏道修行は生き甲斐を生きる基本の生活であるという。過剰な物質主義、便利主義の世の中であればある程、生きていくという感覚が薄くなり、生き甲斐が低下していつてしまい、精神的に弱くなってしまうと指摘されている。

先に見た田中治郎氏は、このことを「虚無感」として、次のように述べている。

現代の諸問題と禪（下 室）

日本人は、経済的・物質的な豊かさを手に入れて虚無に陥っているように思える。何が正しくて何が間違っているのか、何が美しくて何が醜いのか、見分けがつかなくなっている。一連の少年犯罪、親の子に対する虐待、自然破壊などの社会現象は、そのほんの一例であろう。私たちを導くべき官公庁さえも、汚職や内部接待などにまみれ、それを隠蔽することに奔走して醜い姿をさらしているように私には見える。要するに、価値観が崩壊してしまつたのではないか。⁽¹⁷⁾

戦後の高度成長により経済的・物質的な豊かさを手に入れたが、反面虚無に陥っていると指摘している。故に、善悪や美醜を判断できなくなつてしまい、汚職や虐めなどの犯罪が増加している。日本人が有していた価値観が崩壊していると述べている。

また、大本山總持寺独住十八世孤峰智璨禪師は、禪はこうした現代の行き詰まりを打開する一助になると述べている。

人生の歩みは、一步一步絶壁に立ち一瞬一瞬深淵にさしかかっているのです。われわれは生存の悩みにたえて生活勇氣に立ち上がらねばならない。このように人々に強い生活力を与え、生命力を授けるものがすなわち「禪」であります。禪は、坐禪を通して生まれながらに仏とひとしい真実の自己に徹し、それを日常生活に生かす実践、自己の徹見、日常生活を最大限に生かすという三つの要素が必要であります。特に、機械に駆使され、人間としての主体性を失いつつある現代において、禪はこの行き詰まりを打開し、人間の自主性、主体性の確立を促進してくれるのである。

ります。⁽¹⁸⁾

生きて行く力を禪が与えることができるし、そうしなくてはならないと筆者も感じる。

また、「就職率の低下の問題」もある。これは、経済の問題、政治の問題と大きく関係するが、個人の気力の低下の問題も無視することはできない。就職率の問題は大学にとっても重要な問題である。

さらに、就職しても辞めてしまふ学生が多いという。雇用の保険のデータによると、就職後3年以内に離職している者の割合は、中卒で約7割、高卒で約5割、大卒で約3割に達しており、とりわけ近年は、1年以内の離職者数が増える傾向にあるという。⁽¹⁹⁾ 離職理由に「仕事が自分に合わない」「人間関係が良くない」などを挙げる人が多いと言う。

就職率に対しては、景気を良くすることが一番であるが、自分の望まない職業には就かないという態度を是正すれば、就職率は伸びるという。俗語にある「3X」とは、「危険」「汚い」「きつい」の三語の頭文字からきており、こういった嫌われる職場・職種に対して使われる。自分のやりたいことを見つけ、そして望む職業を選ぶということは大変重要であるが、一方で与えられたものは何でもやってみるという態度も、人間の成長にとっては必要なのではないだろうか。

禪の僧堂では、それぞれの寮に転役すればただただそれを

勤めていかなければならない。筆者も僧堂に安居した経験があり、典座（食事を司る係）に配役された時は大変苦勞した。しかし、苦勞した分、大いに成長できたと実感している。また、特に首座という修行僧を引っ張っていく禪堂のリーダー的存在は、東司（トイレ）清掃を率先して行う。世間ではトイレをご不浄とも呼ぶが、禪においては、すべて浄・不浄を超越していると捉える。

水、かならずしも本浄にあらず、本不浄にあらず。身、かならずしも本浄にあらず、本不浄にあらず、諸法、またかくのごとし。⁽²⁰⁾与えられた仕事を何でもこなしていくという姿勢が必要ではなからうか。自分が選ぶことがなかなか難しい世の中では、それはより必要な考えではなからうか。また、勤めてもすぐ辞めてしまう態度に対しても、この禪の修行道場の姿勢は大切なことだと感じる。

四 まとめ

以上、現代の諸問題の中から、政治の問題、現代人の内面の問題について禪の立場から少しく考察した。最後にまとめとして竹内道雄氏の見解を見てみる。

どうもいずれの分野からみても現代は正常な社会ではなく、いわゆる「狂った社会」であり、複雑多岐でとうてい一面的に規定できない性格をもっているといえる。しかし私も宗門人としては、

現代の諸問題と禪（下 室）

こうした異常な現代社会に対して、それは高祖道、太祖道が正しく国民の中に浸潤していない為であり、それは一に児孫たる私どもの衆生済度への熱意と力量の不足によると考えなければならぬと存する。⁽²¹⁾

道元禪師、瑩山禪師の教えが正しく国民に浸透していないから、現代の「狂った社会」になり、それは我々の衆生済度への思いが弱いからであると示している。仏法によって、禪によつて国家の難題、国民の難題にこたえていこうという志がなければならぬと感じる。それは両祖の有していた護国思想に連なる思想である。

政教分離に対しては様々な見解があるが、仏教の理想にもとづく政治というものを目指してもよいのではないかと筆者は考える。権力に対し、権力の外側から「国を護る」という命題で仏教、禪が関わることは必要であると思う。また、個人に対しては主体性を発揚するための契機として禪が関わるべきであると感じる。

最後に瑩山禪師の示訓をもって擱筆する。

先づ須らく一切の是非善悪、男女差別の妄見を解脱すべし。次に無為無事、無相寂滅の処に住まること勿れ。此処に承当せんと思はば、他に向ひて求め、外に向ひて尋ねること勿れ。⁽²²⁾

最初に、是非善悪などの差別的見解を捨て、さらにそれによつて得た無相寂滅の状態にも安住してはならない、という。こ

現代の諸問題と禅（下 室）

の教えは、権力対権力という差別の世界を脱し、さらにその上を目指すべきであると捉えることができるし、また、無窮に修行し向上していく存在としての個人に対しても良きアドバイスになると思う。

- 1 奈良康明「釈尊から道元へ」（『道元の二十一世紀』二〇〇一年、東京書籍、五一頁）。
- 2 一九九一年より、「人権・平和・環境」を布教教化の根本としている（sotozen-net）。
- 3 竹村牧男「道元の思想―その基本にあるもの―」（『道元の世―現代に問いかける禅―』二〇〇一年、日本放送出版協会、一〇九頁）。
- 4 『正法眼蔵』「仏道」（春秋社本一卷四七三頁）。
- 5 『正法眼蔵随聞記』三（七巻九〇頁）。
- 6 渡辺玄宗『現代名僧講話』昭和三二年、誠信書房、四一頁。
- 7 論点「消費税と政治」（毎日新聞二〇一二年四月一五日）。
- 8 ブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争―禅仏教は戦争に協力したか―』二〇〇一年、光人社。
- 9 平田精耕「僧堂の生活と現代」（『雲水日記―絵でみる禅の修行生活―』一九八三年、禅文化研究所、一一三頁）。
- 10 納富常天『瑩山禅師と曹洞宗教団の発展』平成一九年、總和会宮城県支部、四一頁。
- 11 『夢中問答』上には次のように記されている。
元弘以来の御罪業と、その中の御善根とをたくらば、何れを多くとせむや。この間も御敵とて、滅ぼされたる人幾何ぞ。その跡に残り留りて、浪々したる妻子眷属の思ひ

は、いづくへかまかるべき。御敵のみあらず。御方とて、合戦して死にたるも、皆御罪業となるべし（川瀬一馬校注『夢中問答』講談社学術文庫、八〇頁）。

- 12 高崎直承『照心禅話』一九六九年、教育新潮社、五五頁。
- 13 田中治郎「現代社会と道元の意義―清貧と沈黙の思想―」（『道元の世界―現代に問いかける禅―』二〇〇一年、日本放送出版協会、一七五頁）。
- 14 田中治郎前掲書一七六頁。
- 15 玉城康四郎「禅と現代」（『禅研究所紀要』第三号、一九七三年、一一四頁）。
- 16 平田精耕前掲書一六四頁。
- 17 田中治郎前掲書一六四頁。
- 18 孤峰智璨『人間を救う禅』一九六四年、教育新潮社、三五頁。
- 19 厚生労働省「職業安定業務統計」。
- 20 『正法眼蔵』「洗浄」二巻八一頁。
- 21 竹内道雄「現代に仰ぐ瑩山禅師」（『宗学研究』一六号、一九七四年、三三三頁）。
- 22 『伝光録』第四一祖同安観志章（曹洞宗宗務庁、二〇〇五年、二三八頁）。

〈キーワード〉 禅、現代、怨親平等

（鶴見大学准教授）